

3度の敗戦が生んだ3様の姿勢

大谷 泰 照 (名古屋外国語大学)

日本もアメリカもヨーロッパ諸国も、かつては異言語に対する関心の比較的低調なお国柄であった。日本は、少なくとも攘夷運動の激しかった幕末までは、欧米の言語に関心を示すことは少なかった。アメリカやヨーロッパの旧宗主国も、第2次大戦終結までは、自らの言語を植民地に押しつけることはあっても、自ら異言語の学習に熱意を示すことは少なかった。

しかし、日本は明治以後、そしてアメリカとヨーロッパ諸国は第2次大戦後、異言語に対するそんな姿勢を大きく改めることになる。

日本の場合は、薩英戦争・馬関戦争、太平洋戦争、日米経済戦争と、3度の戦争に敗れる度に、日本語一辺倒から英語一辺倒、とりわけ「英語国語化論」や「英語教育用語化論」に急転し、その往復運動のサイクルを今日まで重ねてきた。それは、それ以外の言語・文化には目もくれない偏狭な姿勢を生んでしまった。いわば、日本語か、もしくは英語か、という一元的言語文化志向である。

アメリカが、宇宙開発戦争、ベトナム戦争、9.11の対異文化戦争と、3度の戦争の敗戦から学んだものは、彼等の母語がいわゆる「国際語」の英語であるために抱える陥穽の大きさであった。それを克服するために生まれたのが、社会人をも含めて「英語+1言語」を学ぼうとする『21世紀の外国語学習基準』であり、『国家安全言語構想』である。いわば、二元的言語文化志向である。

ヨーロッパでは、普仏戦争、第1次大戦、第2次大戦と、3度の戦争を相戦ったドイツとフランスの反省が、EUという「不戦共同体」の一大プ

ロジェクトを生み、その言語政策として、社会人をも含めて「母語+2言語」を学ぼうとする「リングア計画」を構想した。いわば、多元的言語文化志向である。

母語以外の言語には無関心なかつての言語的「点の時代」から、日本は今や、日本語から英語へと、点から点への往復運動を繰り返す「点の移動の時代」にあるといえる。これに対してアメリカは、母語と母語以外の1言語の距離関係を意識する「線の時代」にあるとみることができる。その「線の時代」の特定言語「一辺倒」の弊害を克服する道として今日模索されているのが、母語と母語以外の2言語の3点を頂点として、相互の距離・角の関係位置を客観的に測定するいわば言語・文化的「三角測量」である。EUでは、今日、この新しい「面の時代」の実験が実地に始まっているといえる。

たしかに、自分の言語に加えて、さらに相手の言語まで学ぶという異言語の学習は、少なくとも20世紀の前半までは、敗者や弱者の側に課せられたハンディと考えられてきた。しかし、20世紀も後半に至って、むしろ相手の言語の学習は新たな発想や情報の獲得であり、それは敗者や弱者の条件というよりも、逆に自らの立場を有利に導くための勝者や強者の条件であるという教訓を、近代の欧米諸国民は度重なる戦争の体験から学びとったと考えることができる。文字通り、「歴史は繰り返さない、もし人が歴史に学ぶならば」である。

きれいごとでは すまされない異文化共生

飯野 公一 (早稲田大学)

仕事柄飛行機に乗る機会が多い。以前はピークシーズンを除けば結構席には余裕があったものだが、最近はいつ乗っても混んでいる気がする。つい先日利用したシンガポールから成田までのフライトもやはり満席だった。その中に、南アジアからシンガポール、成田と乗り継いで、アメリカまで行く団体がいた。彼らの多くがまだ小さな乳幼児を連れていた。荷物の様子からも短期の観光旅行ではなく、長期の滞在あるいは移住のためのフライトではないかと思われた。私の席はたまたまその団体のすぐ後ろだった。

恩師の一人である Frederick Erickson は「不快の瞬間 (uncomfortable moment)」(The Counselor as Gatekeeper, F. Erickson & J. Shultz, 1982) に注目したディスコース分析を通じて異文化コミュニケーション研究を展開したが、今回のフライトを経験し、改めて彼の教えが蘇ってきた。7時間近くのフライトは、悪夢のようだった。小さな子どもたちは泣き続け、その子をあやすため、親は立ち上がり、壁をたたいたり、インド映画で耳にするリズムの歌を歌って聞かせたり、実に騒々しい。食事が出され一瞬静かになったかと思いきや、いきなり目の前でおむつ交換が始まった。臭気が鼻をつく。食後も親たちは非常口前のスペースに集まり、大声での歓談が続いた。飛行機に乗るときはこうした不可抗力の事態に備えて、いつもアイマスク、耳栓、使い捨てマスクを用意し、不快な外部情報から視覚、聴覚、嗅覚を感じる感覚器官をなるべく遮断するようにしている。しかし、今回はその対策もむなしく、「不快な瞬間」というより「不快な長時間」を強いられることになってしまった。途中で叫びたくなる衝動を抑えつつ、成田で機内から一歩出た瞬間、その静寂に我に返る思いがした。

「不快の瞬間」こそが無意識の規範に気づきかけとなるという教えから、このケースを振り返り、タダでは転ばない、何か教訓はないかと考えてみた。その結果、異文化共生はきれいごとではすまされない、というごく単純なことを再認識するに至ったのである。誤解を避けるため申し上げておくが、私は移民排斥や差別主義を訴えているのではない。むしろ人の移動が自由になり、共生していくことが、必要であり、大切なことだと思っている。私自身海外で長いことお世話になった身でもある。すでに世界は加速度的にこの狭い飛行機の空間のようになっているのではないだろうか。限られた空間で人類が生き延びるための英知として、体感可能な公害などは言うまでもなく、最近では無色無臭のCO2の排出までもが人類共通の課題として取り組まなければならないという認識が高まっている。しかし、こうした外部効果に対する受け止め方は社会の発展段階や文化的背景によって相当な温度差があることも事実である。グローバル化した世界にあって、食の安全、感染症対策など地球規模で解決しなければならない課題に対しては文化相対主義を理由に放置しておいてもよい、というわけにはいなくなっている。このフライトに象徴されるように様々な行動規範を持った人間が空間を共有しなければならないケースは今後ますます増えていくことであろう。その際どこまでが文化差の問題として許容されるのであろうか。

自らを振り返り、普段は言語という明示的な文化差に関心を寄せ、異文化共生のために言語問題をどうしたらよいか、などときれいごとの議論を続けているが、見慣れない服装、リズムの異なる音声、鼻をつく臭気など、一人一人の感覚器に強烈な刺激が襲いかかってくるのが異文化接触の現実である。同時にこちらが当たり前だと思っている規範を常に問い直す知的作業も怠ってはいけないのである。あの機中で泣き続けた子どもが成人したとき、彼らが見る世界の様子ははたしてどのように変わっているのだろうか。

関東地区大会

関東地区大会が2008年6月14日に早稲田大学で開かれました。参加者は約200名でした。

関東月例研究会

日本言語政策学会関東月例研究会は、あらゆる分野の方々から、言語政策への示唆、提案をいただく機会として、また言語政策研究者の研究発表の場として回を重ねて参りました。これからも、より多くの方々にご参加いただける、魅力的な企画に取り組んで参ります。皆様のご来場を、心よりお待ち申し上げております。

日本言語政策学会関東月例研究会

日時：第4土曜日 午後3時～5時（原則）

場所：早稲田大学西早稲田キャンパス22号館

<http://www.waseda.jp/jp/campus/index.html>

○ 月例研究会の記録（敬称略）

- 5月31日：杉野俊子（防衛大学校）「親の教育言語選択の要因—日本のブラジル人学校と米国のラティーノの場合」
- 7月26日：矢頭典枝（神田外語大学）「カナダの言語状況と公用語政策—社会言語学的な観点から」
- 9月27日：田中慎也（本学会会長）「国家戦略としての『大学英語』問題」
- 10月25日：飯野公一（早稲田大学）「プラグマティズムの言語政策—マレーシアの英語重視政策の動向から」

○ 月例研究会で発表なさいませんか？

発表をご希望の方は、①お名前、②ご所属、③ご専門（関心領域）、④発表のタイトル、⑤概要（200字程度）、⑥連絡先、⑦発表希望の月、を明記の上、ご希望発表月の2ヶ月前までに、電子メールで事務局までお申し込み下さい。（猿橋順子）

関西地区研究例会

第3回研究例会が2008年5月17日に奈良教育大学で開かれました。

1. 鈴木崇夫（名古屋外国語大学・院生）
「多文化共生と日本社会」—異文化背景を持つ子どもへの言語教育を中心に—
2. 棚橋尚子（奈良教育大学）
「児童生徒を対象にした漢字習得調査の問題点」
3. 亀嶋潤子（大阪大学）
「外国人児童の言語教育に関する政策—関西地方の事例から—」

第4回研究例会のお知らせ

開催担当者：西山教行（京都大学）

10月25日（土）午後2時より5時まで（予定）

場所：京都大学吉田南構内吉田南1号館

共205演習室（2階）

発表者：レイモン・ルナル先生

（ベルギー、モンス・エノー大学 名誉教授、日本学術振興会による招聘研究者）

題目：「言語生態学に見るフランス語の位相」

（フランス語による講演、日本語通訳付き）

概要：言語生態学の観点から考えて、18世紀にフランスの著作家リヴァロールの唱えた普通言語としてのフランス語から、現在欧州連合やユネスコ、フランコフォニー国際機構が訴える、多様な言語の一つとしてのフランス語への移行をどのように考えることができるか、言語学、教育心理学、言語心理学、地政学、社会政治的観点より、考察する。（杉谷真佐子）

2008年度 役員異動

運営委員

（新任）前田理佳子（大東文化大学）

棚橋尚子（奈良教育大学）

学会誌論文募集

『言語政策』5号の投稿論文を募集しています。HPの投稿要領・執筆要領を参照の上、奮ってご応募ください。

締め切り：2008年12月末日

【訃報】5月27日、野村敏夫理事が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

第10回 日本言語政策学会大会

グローバル化時代の言語教育
— 欧州の経験は日本社会で活かせるか? —

日時：2008年11月8日(土)・9日(日)
会場：奈良教育大学 共通講義棟(101・102・104)
会費：会員(無料) / 非会員(3,000円) / 非会員の大学院生(1,500円)

11月8日(土) 12:00 ~ 受付
13:00 ~ 開会の辞(101教室)
田中慎也(日本言語政策学会会長)
会場校挨拶

柳澤保徳(奈良教育大学学長)
13:15 ~ 14:15 基調講演(101教室)
Prof. Dr. Michael Byram(Univ. Durham, England)
European Approaches to Language Policy.

— Historical and contemporary perspectives —
司会 大谷泰照(名古屋外国語大学)
通訳 松浦京子(京都産業大学附属中高等学校)
14:30 ~ 17:30 シンポジウム(101教室)
Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) と日本での応用可能性?

パネリスト Prof. Michael Byram
西山教行(京都大学)
杉谷眞佐子(関西大学)
真嶋潤子(大阪大学)

司会 橋内武(桃山学院大学)
18:00 ~ 20:00 懇親会(生協食堂)
会費 3,500円

11月9日(日) 9:00 ~ 受付
10:00 ~ 12:00 一般発表
事例報告(101教室)
タイ・プーケット島における言語景観—観光地の多言語化研究の一例として

山川和彦(麗澤大学)
言語選択・国際化・共生に対する二面性—浜松市の地域住民と日系ブラジル人の場合—

杉野俊子(防衛大学校)
ブータン王国の言語政策—現状と課題—
西田文信(麗澤大学)

司会 棚橋尚子(奈良教育大学)
研究発表(102教室)
英語教育と国語教育の連携に関する一考察

五十川敬子(立命館大学)
家庭環境・社会環境の相違に起因する英語力格差とその歴史的変遷

寺沢拓敬(東京大学・院生)
我が国の外国語教育への提言—韓国の外国語教育政策に鑑みて—

塩見千夏(関西大学・院生)
司会 李 守(昭和女子大学)
研究発表(104教室)

日本の対外政策からみた中国語教育の変遷—中国語教科書にあらわれる文字表象の政治性—
張 伶華(京都大学・院生)

言語権概念の批判的検討
かどやひでのり(津山高専)

日本語教育のあり方を考える—フランスの言語政策と対比して—
山口雅代(名古屋外国語大学・院生)

司会 佐々木倫子(桜美林大学)
13:00 ~ 総会(101教室)
13:30 ~ 14:30 基調講演(101教室)
水谷修(名古屋外国語大学学長)

「国語教育と日本語教育をめぐって」
14:40 ~ パネルディスカッション(101教室)

「これからの国語教育と日本語教育—「言語力」育成の観点から、両者の関係を考える—」
パネリスト 水谷修(名古屋外国語大学)
松川利広(奈良教育大学)

兼 司会 宮崎里司(早稲田大学)
16:50 ~ 閉会の辞(101教室)
杉谷眞佐子(日本言語政策学会副会長)

2008年11月1日発行
発行者 日本言語政策学会
(会報担当 高民定 細谷美代子)
事務局 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-7-14
早稲田大学22号館704 宮崎里司研究室
Tel:03-5926-3923 Fax:03-3203-7672
E-mail: jalp.waseda.staff@gmail.com
学会 HP: <http://homepage2.nifty.com/JALP/>
